

折られた二つの笛：牧歌詩人 エドモンド・スペンサーの目指したもの

土 岐 知 子

(1)

ウェルギリウスのティティルス借りるより、英国の田園にあっても自然に聞こえる名前として、マロの詩から採り牧歌詩人スペンサーが自らの志を託したコリン・クラウトは、¹ 二度その笛を折った——もっとも oaten flute とあっても、いわゆる葦笛ではなく、『羊飼の暦』の挿絵が示しているように葦管の付いたバグパイプである。一度は 1579 年上梓の『羊飼の暦』の一月の歌に於いてであったが、もう一度は 1590 年出版の『妖精の女王』第六卷 10 章のアシデイルの丘の上で起こった。

読み人知らずとして『羊飼の暦』を出版したとき、「新詩人」は単に牧歌的な恋愛詩として書いたのではなく、それは重層的な構造を持ち、政治、宗教、文学の要素を含む、いれば現代に於けるジェイムズ・ジョイスの試みにも似た多声音楽的な作品であった。プロテスタント的急進運動にも加っていた出版業者ヒュー・シングルトンの手によって上梓を見たというのも曰くありげだが、牧歌という伝統ある衣を借りて、多様な主題を扱うこの作品には大いに野心的なものがあつた。それにもかかわらずコリンは最初の歌で So broke his oaten pype, and down dyd lye (1.72)² と語られ、コリンは葦笛を折って横になり寝そべってしまうのである。また『妖精の女王』の第六卷は礼節の騎士の物語であるが、そのクライマックスに当たる美の女神たちの舞踊の場でもう一度笛は折られた。もし全十二巻の目的が、ローリー卿宛の作者の書簡にも説明されているように、紳士や高貴の

位ある人々を人間らしい徳の教えに従って薰陶すること [to fashion a gentleman or noble person in vertuous and gentle discipline]³ にあるとすれば、理想とする宮廷紳士の人間教育の追求という点で、礼節の巻はそれまで完成された六巻の結論とも考えうるものとなっている。⁴ 躊躇うことなく踏み込んでくる騎士カリドーに美神たちを囲む妖精は、みな霧消してしまふ。すると the shepherd, ... broke his bag-pipe quight, / And made great mone for that vnhappy turne と語られているように、コリンはここで再度笛を折るのである。田園の詩人をこのように激昂させたものは何か。本論に於いて、スペンサーの詩人としての出発点と、その文学的生涯のほとんど終わり近くなって示されたこの象徴的な行為に、詩人は何を託しているかを述べてみたい。

(2)

笛を吹く羊飼いの名をウェルギリウスに負わず、英国風のコリン・クラウトにしたのは、気まぐれの思い着きではなく、これには若き詩人の並々ならぬ心ばえが認められる。五、六十年代生まれのスペンサーの同時代人は、歴史の成熟と共にそれまでになく大学で学んだ知識人が多くなった世代だったが、その中でも純粹に詩人をその生業とする決心をした者はエドモンド・スペンサーひとりであったと言ってもよい。ルネッサンスの英国でスペンサーほど強く詩作を天職と心得え立つことを意識した人はなかったと、リチャード・ヘルガソンは言い切っている。「スペンサーの同時代の文人たちは、紳士階級に属し、彼らにとって詩作とは単に若者が被ぶる帽子に付いているリボンに過ぎず、それをあまりひらひらさせて歩くと、滑稽で恥となる恐れがあった」と言うのである。⁵ 宮廷紳士の生涯の目的は政治参加にあり、詩作はどうあっても一生をそれに費やすものにはなりえなかった。しかしながら 1580 年親友ゲイブリエル・ハーヴェイに宛てて書かれたスペンサーの書簡には、若き詩人の自負と詩的言語の成熟を望む熱い思いが感じられる。“Why a God's name may not we, as else the Greeks, have the kingdom of our own language?” とあり、「我々がギリシアの人々と

同様に、我々自身の言葉の王国を建てえないという理由はない」と書き送っている。ヘルガソンの指摘を待つまでもなく、⁶ 詩人は「我々自身の」と言って、単に詩人たちの連体感を示しているのではなく、主体は我らにありと宣言しているのである。古典文学の完成度の高い美しさを規範としたとき、自国の文学的後進性を痛感するのだが、屈するところがあればこそ、自国の言葉の成熟を促し、統一ある国語の美しい秩序を保つ詩的言語の王国で支配者たらしとする気持は強くなる。ここには詩人の決意が読み取られるのである。

「言葉の王国」に於いては、詩的主題とともに、用語、韻律など、修辞・表現に用いられる詩の言葉のありようが問題とされた。スペンサーは母国語の純化と充実に全精力を注いだ。『羊飼の暦』の註釈者、E. K. が「新詩人」をゲイブリエル・ハーヴェイに推称する書簡という形で、スペンサーの詩人としての試みについて語っている。⁷ 詩人は母国語の正統な統一性を見出し、「上質の自然な英語」の育成を目指していると説明されている。

For in my opinion it is one special prayse, of many whych are dew to this Poete, that he hath laboured to restore, as to theyr rightfull heritage such good and naturall English words, as haue ben long time out of vse and almost cleane disherited. Which is the onely cause, that our Mother tonge, which truely of it self is both ful enough for prose and stately enough for verse, hath long time ben counted most bare and barrein of both. Which default when as some endeououred to salue and recure, they patched vp the holes with peces and rags of other languages, borrowing here of the french, there of the Italian, euery where of the Latine, not weighing how il, those tongues accorde with themselues, but much worse with ours: ...⁸

英語には必要とされる表現力が欠けていると考えた先人たちは、フランス語イタリア語からあれこれと借用し、ラテン語は見境なく使って、原文中でその言葉が適切に用いられているがどうかも検討せず、ましてや英語の

文中にあってその借用語が悲惨な有さまであっても意に介さずの状態だと、当時の国語の状況を分析している。「そんな訳で我らの母国語は今日、外国語の寄せ集めあるいはごた混ぜ」の観を呈していると言うのである。そこで「新詩人」は英語の歴史を遡及して言葉を求め、擬古体の言葉遣いで、詩的言語の力を取り戻そうとしていた。

「一月」で歌い始めたばかりで葦笛を折ってしまわなければならなかったコリンの不満と絶望の原因は何か。梗概では拒絶された恋心のように書かれている。しかしコリンの荒廃した心理状態は、恋の嘆きと言うよりは、むしろ大志を抱く詩人として人心を動かす力量を持たないという自覚によって惹き起こされた考えるべきだと思われる。コリンの心情は荒涼とした厳しい冬の自然と呼応する形で描かれている。それは冬の季節には珍しく明るい春陽を思わせる日と設定されている。生命と調和と創造の時の到来を予感させる光ではあったが、陽に誘われて連れ出した羊たちは、それまで寒風を避けて囲われていたため、脚も弱って覚束無い。衰弱は羊飼も同じで、コリンは力なく蒼ざめ痩せ細っていた。夏には水仙の咲き乱れる野原も今や冬がその外衣を汚してしまっている。同じく羊飼の心にも冬が宿り生命の血潮は氷り、生身の者とも思えぬ冷めたさだと言う。冬枯れの枝には花の更りに、木々の涙が霧氷となって結ばれているが、牧歌詩人の心も枯れ果てて、生氣はない。

All so my lustfull leafe is drye and sere,
My timely buds with wayling all are wasted:
The blossome, which my braunch of youth did beare,
With breathed sighes is blowne away, and blasted
And from mine eyes the drizling teares descend,
As on your boughes the ysicles depend. (36-41)

吐息が葉を吹き散らし、枝から氷柱が下がるように、詩人の目から驟雨となって涙が降る。羊だけが証人の寂しい詩人の心の荒廃を招いた原因は、

May seem he loved, or els some care he took: (9)

と推測されている。恋の痛手ゆえか、「何か別の心配事があるのか」とその原因を明確に断定していない。もっともこの9行目の読みは、たとえばハミルトンのように、前半だけが注目されて、ロザリンドの拒絶がコリンに笛を折らせたと解釈されてきた。⁹ しかし、ジョン・ムーア、Jr. が指摘しているように、後半に注目しロザリンドに憧憬を抱く経緯を注意して読みとると、コリンは彼女に出逢う前から carefull hower (1.49) を過していたことが判る。¹⁰

A thousand sithes I curse that carefull hower,
Wherein I longd the neighbour towne to see:
And eke tenne thousand sithes I blesse the stoure,
Wherein I sawe so fayre a sight, as shee. (49-52)

鬱々と煩悶していたコリンは、気晴しに近隣の町へ出かけることを思いたち、そのとき初めてロザリンドの姿を見たのである。彼女に逢って「祝福すべき胸騒ぎ」を覚える前に、コリンの心は消沈していた。

ムーアによれば、「一月」の牧歌は恋愛詩として伝統と異なる重要な点がひとつあるという。¹¹ 伝統的恋愛詩に於いては、羊飼に心を許さない恋人を嘆き、自己嫌悪に陥って自らの惨めさと比較して平穏な自然を羨むというのが基本の形であった。詩人はそれに変革を加えたと言うのである。従来牧歌の恋愛詩は愛を捧げる女性に対する嘆きで始まるのであるが、「一月」の歌は、ロザリンドに憐れみを求めるのではなく、神々に語りかけ憐れみを請うているのである。「伝統のこの改良によってスペンサーは、ロザリンドではなく神々をコリンの歌に心を開かぬ恋人としている。……人は神を愛し仕えるが、神の報いはあるのか」と問うのである。¹²

野に出たコリンがまず口にしたのは、愛神のみならず牧神に対する呼びかけであり、憐れみの懇願であった。ここでコリンの心を占拠していたのは、恋愛詩に於いても普遍性のある詩を書くということであった。田園の

羊飼の世界を越えて、またロザリンド個人の愛と称賛を得ることに止まらず、彼女に出逢った「町」にも象徴される都会的・宮廷的価値の世界にも通用する歌によって、初めて牧歌詩人の目標は達成されるのである。歌が「鄙びた歌」として軽視されるのは、コリンにとって単に恋する者の個人的心情の問題に止まらなかった。愛神には自らの心情の純粹にして高貴なることを願うのに対して、牧神には詩的創造力を請うのである。愛神には精神的達成を、牧神にはそれを詩と化す普遍的芸術の表現の力を与え給えと祈るのである。

パンはオヴィディウスの牧神によって、それ以前に見られた肉欲の形象から、芸術的欲求と変ずる創造的エロスの象徴へと変容した。

牧神が追う対象シリックスは、芸術という代替形式で欲求を満足させるための道具となった。……恋する者として、また楽の音を奏る者として、牧神は創造力を持つエロスの特殊な形の具象化である。芸術的欲求に変容された肉欲としてのエロス、心痛から詩へと遁走するエロス……¹³

牧神の追跡は現実を芸術に変容させるという点でコリンの模範となる。

これまでコリンは牧神をその笛の音で満足させてきたし、あくまでも彼は鄙びた牧歌の形式で歌う決意ではある。しかし、彼は自分の歌がホビノル¹⁴のような同性の同じ生業の者にしか理解されないことに絶望している。ロザリンドはコリンの日常的田園世界の向うの世界の象徴としてある。

Wherefore my pype, albee rude *Pan* thou please,
Yet for thou pleasest not, where most I would:
And thou vn lucky Muse, that wontst to ease
My musing mynd, yet canst not, when thou should:
Both pype and Muse, shall sore the while aby.
So broke his oaten pype, and downe dyd lye. (67-72)

もっと普遍性のある主題として、もっとも多くの人々の魂を奪う調べで歌うべきだと彼は思う。「言葉の王国」の覇者となるには、詩的想像力は一月

の野に同じく凍結して、まるで老年のごとく枯渇して (11.29-30) 役に立たない。「蒼ざめた」詩人は、自らの非力に葦笛を折るのである。この激しい衝動的行為には、詩人スペンサーとしての心延えと、高邁なるが故の若き詩人の焦躁感とが表わされている。

(3)

第六巻のアシデイルの場景で折られたコリンの笛にも、詩人スペンサーの目指したものとその結果に対する激しい思いが込められている。アシデイルの丘の上では、カリドーが追求する礼節と詩人コリンの想像力が見たものと、美の恩寵 Grace という点で一致するはずであった。しかし、ここでスペンサーはコリンに仮託して、宮廷に対する幻滅を語り、詩人の無力に笛を折らせるのである。礼節の騎士の物語は『妖精の女王』全巻を通して最も強くスペンサーの文学的関心を出したものだと言えよう。美德と人間性とを根幹として宮廷人を訓育することがこの物語詩の目的ならば、スペンサーの詩的言語の力が、どれほどまで現実の人間社会を、目標とする理想に近づけることが出来たのかが、ここで問われている。「言葉の王国」のオルフェウスの覇者となりうるのか、これが第六巻の通奏底音である。

礼節とは何か。スペンサーの定義では、それは何よりも言葉の秩序を意味した。礼節の敵は言葉の混乱であり、自制できず激情に駆られて多弁になる。それは虚偽、悪意、嫉妬心から、押えようもなく吐き出される中傷、誹謗、根拠のない風聞となる。その背後にバベルの混乱を暗示する言語の分裂は、多弁獣、Blattant Beast の寓意で表わされる。命名の由来は明らかな記録はないが、『アイルランド事情』にも嫉妬心が blatter するという形で使われているし、ラテン語の語源としてクーパーの辞書 (1565) には blatero という項目の下に、「無味にべらべらしゃべる」という意味が付されている。この怪物、人間ばかりでなく、神々をも震撼させる悪鬼 (xii.37) である。混沌の地獄に住むものの血を引き、ケルベロスとキマエラの息子 (i.8) とも言われ、母の暗い洞穴の中で汚辱の交りによって生れスティックスの湿地で長い間育てられたとか。また嵐の激しさで襲いかかるタイフーン

と、乙女の顔を持ち半身は蛇の姿をしたエキドナとの間に生れたヒドラの如き怪物とも言われて、善悪見さかえなく、身分の高い者、下賤の者にみな吠えたてて、多頭の毒蛇のごとく人を選ばずその舌で杖打つのである。

多弁獣の跳梁は個人の倫理の問題に止まらず、社会の病弊の証しであり、社会的倫理の規範が明瞭な形で示されないとき、この怪物がそれを代行する。

ある意味では多弁獣は道徳的裁定者、判定者の役割を引き受けて、多数の舌を持つ「通念となっている意見」や、風聞、隠口、醜聞、「名声」という形を取るものである。それは現在もしくは未来の大衆社会の姿であり、人格を持たず無名で、無差別にして果てることのない喧噪となる。¹⁵

多弁獣は宮廷社会のみならず、森にも野原にも出没し、騎士の追手を巧みに躲して、ついには僧院にまで押し入っている。

Into their cloysters now he broken had,
Through which the Monckes he chaced here and there,
And them pursu'd into their dortours sad,
And searched all their cels and secrets neare;
In which what filth and ordure did appeare,
Were yrkesome to report; yet that foule Beast
Nought sparing them, the more did tosse and teare,
And ransacke all their dennes from most to least,
Regarding nought religion, nor their holy heast. (VI.x.24)

何もののをも容赦せず、宗教的権威までも腐敗していると糾弾し、真偽を確かめず暴きたてる言葉の破壊力は、宮廷人の礼節をもって鎮静できるものなのか。詩人はオルフェウスのような詩の力で宮廷社会に「言葉の王国」を築きあげたとき、秩序が回復されると考えた。

多弁獣の餌食になった者の傷は深く、その回復は「森」の中での自製の訓練以外には望めない。セリーナとアーサーの従者ティマイアスは隠遁者の庵で傷を癒していたが、両人とも多弁獣の傷は深く、知らぬ間に化膿し

て深部に痛みを持たらし、壊疽が始まっていた (vi.5)。この内なる傷を知った隠遁者は、彼らの自暴自棄の感情を癒し、精神的な秩序を回復するためには、自制の道が必要と説く。

For in your selfe your onely helpe doth lie,
To heale your selues, and must proceed alone
From your owne will, to cure your maladie.
Who can him cure, that will be cur'd of none?
If therefore health ye seeke, obserue this one.
First learne your outward sences to refraine
From things, that stirre vp fraile affection;
Your eies, your eares, your tongue, your talk restraine
From that they most affect, and in due termes containe. (VI.vi.7)

多弁獣の毒が回った者は自己鍛錬による自制以外には治療の道がない。軟弱な感情を惹き起すものを断ち、感覚を鍛え、目、耳、舌、口（言葉）を慎しみ、欲望に負けず節度を保つべしというのである。外部からの刺激に冷静に対応できる感覚と言葉の統制力こそ、礼節の騎士カリドーにも求められているものであった。

(4)

リチャード・ノイズも述べているように第四巻以下『妖精の女王』の後半は、作者の理想と詩人が実際に経験した現実の間の乖離が色濃く反映されて、幻滅の調子が強く出てくるのだが、社会に言葉の秩序を回復する使命を帯びたカリドーがグロリアナの宮廷を出発したときには、その礼節により誰からも称賛を集める騎士として紹介されていた。心根の優しさと穏やかな物腰は生得のものであり、加えてりりしく眉目秀麗であるという。「洗練された話ぶりは人の心を魅了せずにはおかなかった」(IV.i.2) し、それでいてその身は屈強、激しい戦場で闘い抜いて、騎士の名声は遠方まで聞えていたとある。さらにカリドーの称賛は続き、

Ne was there Knight, ne was there Lady found
In Faery court, but him did deare embrace,
For his faire vsage and conditions sound,
The which in all mens liking gayned place,
And with the greatest purchast greatest grace:
Which he could wisely wse, and well apply,
To please the best, and th'euill to embase.
For he loathd leasing, and base flattery,
And loued simple truth and stedfast honesty. (VI.i.3)

騎士はその美しい物腰と涼しげな容姿によって、宮廷人の間で人気を確得したばかりでなく、いとやんごとなき方の寵愛をも得ていた。美質を最大に利用して、高位高宮の勸心を買ひ、卑劣な者は断罪した。それは欺瞞を嫌い追従を許さず、率直な誠意と着実な正直さを愛したからという理由が加えられると、まずはカリドーが理想とする礼節の騎士であろうと、その姿を思い描く。しかしながら用いられている言葉に注目すると不安な響きが聞こえてくる。¹⁶ 5行目の寵愛を得るという表現に *purchase* を用い、さらに *use* や *apply* など功利的な言葉の選択が印象に残るのである。たとえば第六巻第二編に登場するトリストラムの描写と対比してみると、この「細い若枝のような十七歳の若者」は曇りなく軽快である。

Buskins he wore of costliest cordwayne,
Pinckt vpon gold, and paled part per part,
As then the guize was for each gentle swayne;
In his right hand he held a trembling dart,
Whose fellow he before had sent apart;
And in his left he held a sharpe borespeare,
With which he wont to launch the saluage hart
Of many a Lyon, and of many a Beare
That first vnto his hand in chase did happen neare. (VI.ii.6)

ライオネス（コーンウォール）の王マリオグラスを父に持つトリストラムは、現在森に住む者として、ルネッサンス当時英国で最も美しい緑と言

われたりリンカングリーンのその身に纏い、狩人の角笛を腰に下げて健やかであった。ベルフィービーを思わせる衣裳 (II.iii.27-9)、スペインのコードヴァン皮の長靴は飾り穴から金の裏地が見えている。右手には緊張に震える矢を、また左手には多くの獅子や熊を貫いた槍を携えていたと描出され、含むところがない。王家の者であり、その *grace* が天与のものであるという点に於いて、また今は森に住む者であるという点に於いてカリドーは異なり、そうしてこの二点は、まさにスペンサーが牧歌形式で礼節を語る際の重要な差異を成している。

ここで第六巻に提示される礼節をスペンサーはどう定義し、それにどのように評価を与えているかを考えておこう。「^{ユート}宮廷に端を発しているので、人は^{コーテシー}礼節と呼ぶらしい」という言葉で物語りは始まっているが、冒頭の四行は礼節に関する一般論である。

Of Court it seemes, men Courtesie doe call,
For that it there most vseth to abound;
And well beseemeth that in Princes hall
The vertue should be plentifully found,... (VI.i.1)

推量の言いまわしには批判の響きがあり、起源と現状は異なることを暗示している。*useth* の語尾は現在の宮廷の慣しを表わしているのか、*used* の綴りの形であって、今は昔となってしまったと概嘆しているのか曖昧にしてある。さらに *beseemth* および *should* (4行目) によって、詩人は宮廷の現状を称賛しているのではなく、あるべき姿の期待を述べていることが判ってくる。実際第六巻の序歌に於いてもすでに詩人の視点は明瞭に示されている。美しい礼節は宮廷社会に満ちて、素朴な古代にも並ぶほどであるが、それは上辺ばかりの見せかけで、炯眼の持主なら眩惑されずにその実情を見抜くであろう (Proem 4) と言うのである。

礼節は本来「神聖な花園」(Proem 3) で育てられた天上的美徳のひとつであったが、カリドーの行動を通して描かれる礼節は絶対的真実というより、*civill conversation* (VI.i.1) の中で発揮される美徳である。その欠くべか

らざる要素は隠やかさと上品さであり、内的探求というより外向する徳である。

この美德はカリドーの特徴でもあり、それはユナが真理の美德の表象であるという意味とは異なる……。カリドーは真理の探求を表わしているのではなく、他者との交際に於ける誠実な自己表白を問題にしているのである。この意味でカリドーはアリストテレスが語る *verity* の美德を表わしている。¹⁷

礼節は個人の魂の上昇を絶対的目標としているのではなく、社会的意識が問われる相対的な価値になっている。

つとに J. C. ジャドソンの研究にも紹介されているように、¹⁸ 当時多く出版された礼節の本は、身分境遇の異なる相手に、それぞれ相応しいと考えられる応対ができるようにと教えている。*The Institution of a Gentleman* (London: 1555) には、宮廷風の礼儀を心得たい者は、あらゆる階級の人の扱い方、遇し方を知っておかねばならないし、自分が受ける待遇についても心得がなければならないとある。ステファノ・グワッツォの *La Civil Conversation* (1574) にも、国王から下層の者まで、学問のあるなしにかかわらず、異邦人でも、宗教家でも俗人でも、男女の差別なく、相手にかなった対応をすることこそ紳士の徳であると述べられている。しかし、これは忽ち「交際の果実」を期待する便宜主義の傾向を強めてしまう。人を敬うのも、優しくするのも、愛想のよさ気持のよさで、人の好感を得るためであり、裁判に於いてでさえ、相手の心情を忖度して進めれば、多くの味方を集めることができる。野心や傲慢は慎しむべし。それは嫌悪、憎しみ、悪意、軽蔑を誘う行為だからであるとネンナは教えている。¹⁹

カリドーは前述の便宜主義的礼節をあまりにも見事に実行している。それはパストラルの場面で、いよいよ明白になる。与えられた仕事を果すために、騎士は多弁獣を追って丘を越え谷を渡り森を抜けて難儀していたが、とうとう羊飼の野原に迷い込む。田園牧歌詩の構造からすれば、林野は宮廷人の学習の場として設定されるはずであった。しかしカリドーは六卷十一章で羊飼の輪の中に闖入したときから、騎士としての任務を忘れて

道草をくうばかりか、自然の中の質素で充足した生活に学ぶこともなく、のっぺらぼうの精神のまま通り過ぎて行く。

カリドーが再度物語に姿を現わして以来、精神性の弱い習慣と化してしまったカリドーの礼節意識が暴露されてゆく。パストラル的な価値の構造を見抜けない騎士は、都から遠く隔たる田園の量りを知らない。宿を提供してくれた隠遁者と食後の話が弾み、幸、不幸、貧富の差は心の有ようによろと語る老人の言葉に耳を傾けていたカリドーだったが、結局彼が説く真理は理解できない。

...fooles therefore

They are, which fortunes doe by vowes deuize,

Sith each vnto himselfe his life may fortunize. (VI.ix.30)

自分の望み通りに運命を変えようと企てるのは、愚者の仕業であり、各々の分限に応じて自らの運命を制禦すべきだというのが隠遁する老人の忠告である。しかしカリドーはその言葉を、自分の望む運命は自分で選ぶことができるという考えの保証と誤解して、しばしの逗留を依頼する。この誤解も田園的価値の無理解がその原因であるのだが、彼はさらに、止宿の謝礼として金銭 *golden guerdon* (VI.ix.32) を差し出してしまう。カリドーには言葉のみの感謝という真の礼節があることが理解されていない。

求愛するカリドーの礼節にも、内面的純粋性が欠けていた。パストレルが最初に登場したとき、アシデイルの丘と相似を成す高みにあったということで、彼女の精神性と美しさの本質が暗示されているが、騎士はその意味も知らず、もっと感覚的充足を求めている。

Whylest thus he talkt, the knight with greedy eare

Hong still vpon his melting mouth attent;

Whose sensefull words empierst his hart so neare,

That he was rapt with double rauishment,

Both of his speach that wrought him great content,

And also of the obiect of his vew,

On which his hungry eye was alwayes bent;
That twixt his pleasing tongue, and her faire hew,
He lost himself, and like one halfe entraunced grew. (VI.ix.26)

彼女の義父と話しにうち興じながらも、目は娘の姿を追い回して、心ここには在らずという様子だった。秘かに妻、Princes Paragon にしたいと思う騎士は、日々宮廷風の礼を尽くして愛を得ようと腐心するのだったが、彼女は都人の扱いに馴じめず、騎士を顧みることはなかった。そこでカリドーはきらびやかな騎士の装いを捨てて、田舎者の衣服に襲して羊飼の杖持って、彼女の後に従って毎日野原に出掛ける。この扮装の意味は、後になってアシデイルの三女神の裸身の意味が明されるとき、その対照によって語られる。

Therefore they alwaies smoothly seeme to smile,
That we likewise should mylde and gentle be,
And also naked are, that without guile
Or false dissemblaunce all them plaine may see,
Simple and true from couert malice free: (VI.x.24)

三美神が衣を纏わぬ理由は、裸身が欺瞞や見せかけではない真理であることを示している。隠蔽された悪意はなく、純粹にして誠意ある実体である証明なのだ。パストレラの歓心を買うため、外観のみを変えて服装を相手に合わせる事が礼節と信じて疑わない騎士として、カリドーは滑稽というより軽薄な人物として描かれている。

パストレルを巡る恋敵である若い羊飼のコリドンを前にして、カリドーの対応は極端な便宜主義の様相を呈している。礼節の本の忠告に寸分違わず従って、相手に礼を尽して人望を得ようという魂胆である。しかし、これは半ば無意識のうちに実行され、またあまりにその手並みが鮮やかであることで、いよいよ礼節の形骸化した実情が浮彫りにされる。

よく晴れたある日、木陰に羊を憩わせて、羊飼は仲間で競技に興じた。かねて片思いのコリドンは、いつも嫉妬に燃えて、恋敵きに対抗意識を

持っていた。しかし礼節の騎士カリドーは踊りの輪の中ではコリドンにリードを譲り、パストレルが贈る花輪を外して、コリドンの頭上に載せた。コリドンが長年鍛練してきたレスリングでも同様に、屈強の騎士の敵ではなく、すんでのところでは首を折り、腕を挫じくところであり、それでもカリドーは、パストレラの贈る櫛の葉の冠を彼に譲り、その技を称賛した。かくしてついにカリドーは敵意を持って張り合っていた羊飼たちからさえ好意を受けることになった。

Thus did the gentle knight himselfe abear
Amongst that rusticke rout in all his deeds,
That euen they, the which his riuals were,
Could not maligne him, but commend him needs:
For courtesie amongst the rudest breeds
Good will and fauour. Sot it surely wrought
With this faire Mayd, and in her mynde the seeds
Of perfect loue did sow, that last forth brought
The fruite of ioy and blisse, though long time dearely bought. (VI.ix.45)

カリドーは羊飼たちの間で礼節の果実を収穫することに成功したばかりか、パストレルの愛をも奪ったのだったが、詩人スペンサーはその功利主義的礼節に対する批判を、言葉の選択によって表わしている。騎士は彼女の心に礼節の種を蒔き続け、それは歓喜と至福の果実をもたらした。それはずい分苦勞して手に入れたと言う時に、スペンサーは *dearly bought* (1.9) を用い、計算高さを暗示してこのスタンザを結んでいる。

アシデイルの丘でのカリドーの振舞いによって、スペンサーは、いかんともいえない宮廷人の限界を、またそれに対する詩人としての苛立ちを共に描いている。それはコリン・クラウトの笛の音に託されたスペンサーの詩が、精神性を持たない礼節の仮面を打ち破って、宮廷紳士の心にまで達することが、いかに難しいかということであり、ここにはそうした経験に対する詩人の焦躁が感じられる。

アシデイルの丘は日常とは異なる精神の高みを表わす場所として、伝統

的に用いられてきた構造を持つ。語源も示しているように、²⁰ アシデイルの丘は野中に一段と高く立ち上る台地であり、木々に囲まれ木末には鷹が舞い、低い木陰には小鳥が歌う。夏冬変わることなく花を付ける木々は常春の楽園、エデンをも思わせ、丘の裾を清冽な流れが巡る。カリドーはそこで笛の音を耳にし、女たちが輪舞するのを目撃した。中に笛吹く者あり、美の三女神と共に第四の女神とおぼしき姿が見える。女王エリザベスとも羊飼の女王エライザとも読み取りうる第四の女神のためにこの笛は奏でられているように見える。笛の音はいよいよ高まり、踊りの輪は崩れることなく回り続ける。軽快な pype の繰り返し、滑らかな [1] の頭韻が、佳境に入った踊りの恍惚感を反映している。

She was to weete that iolly Shepheards lasse,
Which piped there vnto that merry rout,
That iolly shepherd, which there piped, was
Poore *Colin Clout* (who knowes not *Colin Clout*?)
He pypt apace, whilest they him daunst about.
Pype iolly shepherd, pype thou now apace
Vnto thy loue, that made thee low to lout:
Thy loue is present there with thee in place,
Thy loue is there aduaunst to be another Grace. (VI.x.16)

愛を捧げることで我が身の低さを知ったコリンは、今ここで第四の美神として歌い上げる恋人と共に至福の時を経験していた。この光景は牧歌詩人スペンサーに、その詩的言語で喚起することが許された形而的世界を示している。それは^{グレイス}恩寵として与えられ、啓示された美の世界である。詩人は美の光景を、自分の想像力で創造するのではない。それは天与の啓示であり、詩人は啓示の時を待って、言葉に写すのである。木立の陰に隠れて窺うカリドーは不可思議な美の光景に魂を奪われるが、それを美の啓示として、形而上の世界に思いを致すことが出来ない。日常の理性が知りうる範囲に止まっているカリドーは、目の錯覚かとも疑い、実体を解明せずにはいられなかった。

Therefore resolving, what it was, to know,
Out of the wood he rose, and toward them did go. (VI. x. 1)

詩行を二度も切断する 8 行目の語法が、前後の見境なく行動に走る騎士の心理状態を表している。²¹

スペンサーはここで、カリドーの礼節が礼儀の形式に止まり、それによってもものの本質に到達しえないことを語り、騎士の愚鈍さを鮮明に描き切っている。騎士が女神たちの前に姿を現わすと、一瞬のうちにその光景は消滅してしまう。後に一人残されたコリンは、「不快この上なく、激しい怒りで」笛を折るのである。しかしカリドーは愛惜に深く悲しむコリンを見ていても、あるいはそれに愚かにも気付かずに、明るい声で「愉快的な羊飼」と叫びかけてお世辞を言って、ニンフ達の通う処で、彼女たちに歌を聞かせて暮すのは愉快そうだと話しかけるのである。カリドーが追い払ったものは一度そうすると、人の業では呼び戻すことが出来ないこと、また美の恩寵は天与のものであり、与えられた者でなければ、誰も自ら手に入ることは出来ないと言コリンは説明する。

Not I so happy, answerd then that swaine,
As thou vnhappy, which them thence didst chace,
Whom by no meanes thou canst recall againe,
For being gone, none can them bring in place,
But whom they of them selues list so to grace.
Right sorry I, (saide then Sir *Calidore*,)
That my ill fortune did them hence displace.
But since things passed none may now restore,
Tell me, what were they all, whose lacke thee grieues so sore. (VI.x.20)

ここに牧歌詩人スペンサーが宮廷と対立する姿勢で歌い続けてきたものが示されている。詩的靈感によって啓示されるヴィジョンを持ち、ヴィナスが従わせる妖精たちが、名誉と階位が異っているように、価値の階位に従って歌うとき、詩人の言葉にあるべき秩序が生じる。カリドーには天与

の啓示が理解できない。自分が消滅させてしまったのも、「我身の不運」と言って、責任を回避するばかりで、我が心の浅薄なことに思い至ることはない。笛の音が理解できなかったカリドーには詩の言葉を用いずに四美神についての解説が必要であった (VI.x.21-28)。そうして騎士が納得したと言ったとしても (VI.x.29)、それは真理の実体を悟ったと言うよりも、知識として理解したに過ぎない。

(5)

スペンサーは真の礼節を天与の^{グレイス}恩寵と考えた。それが高貴の血筋に拘る理由でもあった。努力の功績によっても礼節の徳は修得できると急いで付け足してもいるのだが (VI.ii.2)、基本的には真の礼節を生得のものとし、自然に発揮される徳と考えている。人間と呼ぶに相応しい振舞をする gentleman は、林野にあってもその血がそうさせていると描いている。トリストラム、野人サティレイン、パストレルはみな高貴の出であることが判明する。ここには単なる貴族趣味ではなく、Grace は天の啓示とする新プラトン主義の思想がある。魂の位階の下層の者、宮廷社会で真理を見据えることのできないものには、詩の矯正力があると自らの力を恃んで、スペンサーは詩の王国の建設に生涯を費やした。それは宮廷政治に生きる者たちの仕事に並ぶもの、あるいはそれ以上の力を発揮できるものと自負する訓育が可能になるはずであった。しかしカリドーの軌跡が示しているように、詩人は目指したほどのオルフェウスの力を宮廷社会に及ぼしたとは言えなかった。長詩『コリン故郷に帰る』の故郷がいずれを指すか、この表題が持つ曖昧さにも、英国宮廷社会に於ける詩人の処遇についての詩人の思いが表わされている。詩人としての生涯の始めに、『羊飼の暦』の最初の月で、英詩の王国建設の決意表明の激しさがその笛を折らせ、その終わり近く、再度笛が折られたときには、孤立する詩の王国に対する諦念と、跋扈する多弁獣に真理を語る言葉もかき消されそうになる宮廷社会への絶望感がそうさせたのであった。

注

- 1 *The Shepheardes Calender* 「九月」の E. K. による註解には、コリン・クラウトが詩人自身を表していると考えられるとなっている。
- 2 Edmund Spenser, *Spenser's Minor Poems*, ed. Ernest de Sélincourt (Oxford: Clarendon Press, 1970).
- 3 Edmund Spenser, "To the Right noble Valorous, Sir Walter Raleigh knight," in *The Faerie Queene*, ed. A. C. Hamilton (London: Longman 1977), 737.
- 4 Richard Neuse, 'Book VI as conclusion to the *Faerie Queene*,' *ELH* XXXV (1968) 329-53; rptd Hamilton, ed. *Essential Articles*.
- 5 Richard Helgerson, "The New Poet Presents Himself: Spenser and the Idea of Literary Career," *PMLA* 93 (1), 1978, 893.
- 6 Richard Helgerson, *Forms of Nationhood* (Chicago & London: the University of Chicgo Press, 1922), 2-3.
- 7 E. K. は詩人自身、あるいはゲイブリエル・ハーヴェイという説がある。いずれにしてもスペンサーの文学観を熟知して説明できる人物である。
- 8 Spenser, *Spenser's minor Poems.*, 5.
- 9 A. C. Hamilton, "The Arguement of Spenser's Calender," *ELH* 23 (1956), 36.
- 10 John W. Moore, Jr., "Colin Breaks His Pipes: A Reading of 'January' Eclogue," *ELR* 5 (1975), 3-24.
- 11 Moore, 9.
- 12 Moore, 9.
- 13 Harry Berger, Jr., "Orpheus, Pan, and the Poetics of mysogyny: Spenser's Critique of Pastoral Love and Art," *ELH* 50 (1983), 35.
- 14 ホビノルはゲイブリエル・ハーヴェイという解釈が通説となっている。
- 15 Neuse, 337-8.
- 16 Neuse, 342.
- 17 John Erskine Hankins, *Some Meaning in Spenser's Allegory: A Study of the Faerie Queene* (Oxford: Clarendon Press, 1971), 177.
- 18 Alexander Corbin Judson, "Spenser's Theory of Courtesy" *PMLA* 47, (1932), 122-36.
- 19 Judson, 134.
- 20 Hamilton (ed.) *The Faerie Queene* の注解。689 頁。
- 21 同書、691 頁。